

令和4年度佐世保市『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』中学生追跡調査報告書

門田 理世(西南学院大学大学院)

中ノ子 寿子(西南学院大学大学院生・尚絅大学短期大学部)

増田 吹子(西南学院大学大学院生・尚絅大学)

土田 珠紀(西南学院早緑子供の園)

江田 菜穂子(西南学院大学大学院生)

佐世保市幼児教育センター

調査結果概要【本文中の参照箇所】

(アンケート調査より)

1. 中学生が考える赤ちゃんふれあうことの意味・価値づけ

- 赤ちゃんとのふれあいを希望する中学生は全体の86.9%おり、そのような中学生は、赤ちゃんに好意的で、赤ちゃんとのふれあいは心地よい希少な経験であると感じていた【p.3-4】
- 赤ちゃんとのふれあいを大切だと考える中学生の97.9%が、赤ちゃんふれあうことは、将来の育児や職業に役に立つ経験であり、生命の尊重や人間性の涵養にもつながると価値づけていた【p.4】

2. 複数回のふれあい経験によって、赤ちゃんへの見方が肯定的に変化する可能性

- 中学生の8.1%が、赤ちゃんとのふれあいに意欲的ではなかった【p.5】
- 『令和5年度佐世保市赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業アンケート調査に関する報告書』では、複数回事業に参加することで赤ちゃんの見方が否定的から肯定的に変化した小学生について報告している。このことから、中学生も赤ちゃんとのふれあいを複数回経験することで、赤ちゃんへの見方が肯定的に変化する可能性がある【p.5-6】

3. 『赤ちゃんふれあい事業』において、子育ての実際を実感する経験をする価値

- 中学生の4割以上が、自分が小学校5～6年生の時に参加した事業のことを記憶し、赤ちゃんの可愛らしさだけでなく、赤ちゃんの扱い難さや育児の大変さも印象に残っている【p.7】
- 子育ての中にあるわずらわしさを含んだ楽しさにふれ、子育てについて考える経験は将来育児を担う際の責任を意識することでもある。したがって事業は、世代間交流が希薄となった現代において、大変さの先にある命を育む責任と喜びに気付くきっかけを提供している【p.7-9】

(インタビュー調査より)

4. 過去の事業参加経験をインタビュー調査で語ることの意義

- 着目した4名は、アンケートでは1名が過去参加した事業のことを覚えており、あとの3名は覚えていないと回答していた。しかし、インタビュー調査での会話から、過去事業に参加した時の記憶が蘇り、4名全員が事業での経験は現在の、あるいは将来の自分にとって意味があると語った【p.9-10】

調査結果より得られた佐世保市への提言【本文中の参照箇所】

1. 中学校での『赤ちゃんふれあい事業』を実施

- 調査結果より、赤ちゃんとのふれあいを希望する中学生が多く、赤ちゃんやその保護者とふれあう経験は、中学生にとって多様な意義があることが明らかとなった【p.10】。今後は小学校での事業で蓄積されてきた知見をもとに、中学校・高校への事業展開が望まれる

2. 赤ちゃんふれあった経験をふりかえり、自分の経験を意味づける機会の保障

- 赤ちゃんふれあった経験を長期的に意味があるものにするためには、事業の一部として、数年後に過去の事業経験をふりかえり、意味づけていく機会を事業に盛り込むことが有効である【p.10】

I. はじめに

佐世保市では平成27(2015)年度より佐世保市幼児教育センターが運営主体となって『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』(以下、事業)を実施しており、西南学院大学大学院門田研究室(研究代表:門田理世)では平成29(2017)年度から、事業での経験が参加した赤ちゃんの保護者と小学生にとってどのような意義をもつかについて調査・検証してきた。事業は、参加する小学生にとって赤ちゃんやその保護者とふれあう経験が、①命の大切さ・尊さ・不思議さ、②相手を思いやる気持ち、③自分の家族(親)との関係を考えるきっかけ、④親の思いを知る、⑤将来の子育てを体験する機会となることを目的に行われており、門田研究室は佐世保市幼児教育センターと協働して、小学生や保護者にとっての事業の意義を各年報告している。

これまで、事業に参加することで、小学生が赤ちゃんを好意的に捉えるようになる、将来自分が親になった時の姿を思い描けるようになる等の意義が明らかになってきたが、事業の目的であるいのちの大切さや尊さ、不思議さを感じることや、思いやりの気持ちを育てること等の心の涵養は、長期的な視点でその育ちを検証する必要がある。そこで、小学5～6年生の時に事業に参加し、赤ちゃんやその保護者とふれあう経験をした子ども達が、中学3年生の時点で赤ちゃんや子育てにどのような意識・印象を持っているのか、小学生時代に赤ちゃんや保護者とふれあった経験をどのように受け止めているのかを検証する追跡調査を行った。

赤ちゃんと小学生の交流は全国的に行われており、赤ちゃんとのふれあいが小学生にもたらす影響や意義については様々な調査がなされているが、3～4年という期間を空けて交流の効果を縦断的に検討した研究は大変希少である。本調査で、過去の赤ちゃんとふれあう経験が思春期の中学生にとってどのような意味・意義・効果をもつのかを明らかにすることができれば、人の育ちや発達を考える上で赤ちゃんとふれあうという経験がどのような意味をもつのかについて、長期的な視点からの検討が可能になる。本報告書では、令和4(2022)年度の佐世保市立山澄中学校3年生を対象として行った初めての追跡調査に関する分析結果を報告する。

II. 調査の概要と分析手法

1. 調査対象

アンケート調査…平成30(2018)年度の事業に参加した当時の小学5年生(佐世保市立白南風小学校)と令和元(2019)年度に参加した当時の小学6年生(佐世保市立木風小学校・佐世保市立潮見小学校)を含む佐世保市立山澄中学校3年生103名

インタビュー調査: アンケートの紙面上でインタビュー調査への協力を承諾した26名

2. 調査日時

① アンケート実施日: 令和4(2022)年12月2日、7日

② インタビュー実施日: 令和5(2023)年1月19日 16:00-17:00

3. 分析の手法

アンケートの中で選択肢による回答は集計をし、自由記述による回答は、意味内容ごとに区切ってコードを付し、抽象度がより高いコード・カテゴリに分類していく質的分析を行った。なお、一つの回答に複数の意味単位が含まれる場合は、記述に込められた回答者の思いを可能な限り汲み取るため、複数のオープン・コードを生成している。以下、オープン・コードを< >、焦点コードを[]、カテゴリを[]、アンケート本文やインタビューでの質問および選択肢を《 》、原文の回答を「」、回答の件数やコードの事例数を()で表す。

III. 調査結果および考察

1. 回答者の属性

本報告書では、山澄中学校3年生（以下、中学生）103名の内、アンケートによる回答を得られた 99 名を対象として分析を行う。

アンケートに回答した99名の内、48名が男性、51名が女性である（図1）。きょうだいの中での出生順位を尋ねると、自分自身が1番上であるという回答が最も多く44名、1人っ子は10名であった（図2）。出身小学校を尋ねる質問に対しては、事業参加校である白南風・木風・潮見小学校の出身者が計93名（94%）を占め、この3校以外の小学校出身者が計6名（6%）である（図3）。《これまでの人生で赤ちゃんに触ったり、関わったりする機会があるか》を尋ねたところ、《ある》が78名（79.6%）、《ない》が4名（4.1%）、《覚えていない》（16.3%）となった。《どのような時に、どれくらい赤ちゃんふれあう機会があったのか》について自由記述での回答を求めると、自分より下の弟妹・親戚の子ども・近所や学童でのふれあいや、「小学校で赤ちゃんふれあいがあり、30分～1時間ほどふれあう機会がありました」という赤ちゃんふれあい事業でのふれあい等、多種多様な接触経験があった。

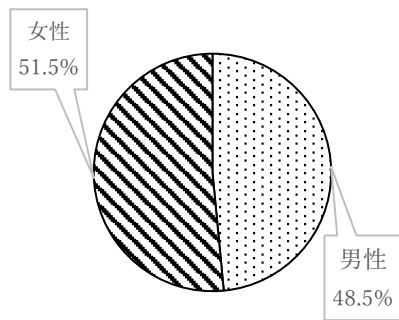


図1. 中学生の男女比

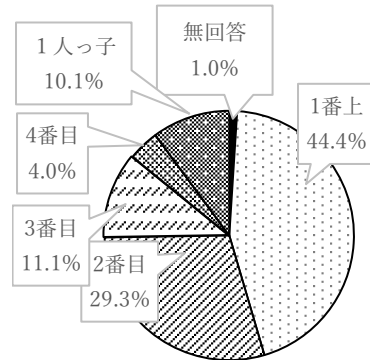


図2. きょうだいの中の出生順位

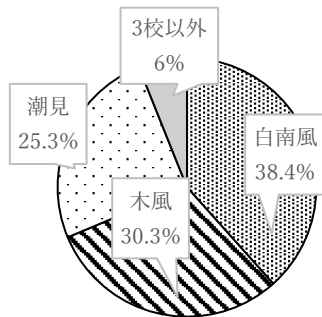


図3. 出身小学校の割合

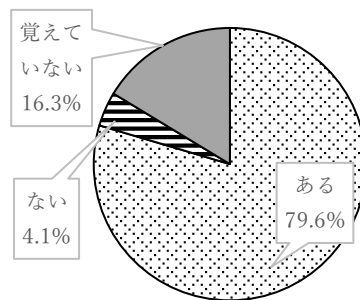


図4. 赤ちゃんとの接触経験の有無

2. アンケートの結果及び考察

(1) 赤ちゃんふれあうことに対して中学生が感じる意義

中学生に《赤ちゃんふれあう機会があったとしたら、その赤ちゃんふれあってみたいと思うか》を尋ねたところ、全体の70%が《ふれあいたい》、16%が《どちらかといえばふれあいたい》と回答した（表1）。その《赤ちゃんふれあいたいと思った理由》の自由記述を分析したところ、3のカテゴリ、7の焦点コード、15のオープン・コードに分類された（表2）。

ふれあいたいと思う理由は、[赤ちゃんに対する好意・興味・庇護欲]、[赤ちゃんとのふれあいで感じる心地よさ]、[赤ちゃんとのふれあいの希少性・有用性]に大別された。このことから、赤ちゃんとのふれあいを希望している中学生は全体の8割以上にのぼり、多くの中学生は赤ちゃん

表1. 機会があれば赤ちゃんふれあいたい

選択肢	回答数(割合)
ふれあいたい	70(70.7%)
どちらかといえばふれあいたい	16(16.2%)
どちらかといえばふれあいたくない	6(6.1%)
ふれあいたくない	2(2.0%)
わからない	5(5.1%)

に好意的で、赤ちゃんとのふれあいは心地よい経験であり、希少性・有用性のあるものであるという多様な意義を認識しているといえる。

表2. 機会があれば赤ちゃんに《ふれあいたい》、《どちらかといえばふれあいたい》と考えている理由 ※一部抜粋

[カテゴリ]	[焦点コード]	<オープン・コード>
赤ちゃんに対する好意・興味・庇護欲(53)	赤ちゃんがかわいくて好き(46)	赤ちゃんがかわいいから(30) 赤ちゃんが好きだから(16)
	赤ちゃんに興味があるから(6)	赤ちゃんのこともっと知りたいから(6)
	赤ちゃんを守ってあげたい(1)	赤ちゃんを守ってあげたくなるから(1)
赤ちゃんとのふれあいで感じる心地よさ(37)	赤ちゃんとのふれあうことが心地よい(20)	赤ちゃんとのふれあうことで癒されるから(14) 赤ちゃんとのふれあうことは楽しいから(4) 等
	赤ちゃんとやりたいことがある(17)	赤ちゃんを抱っこしたいから(6) 赤ちゃんと一緒に遊びたいから(4) 等
赤ちゃんとのふれあいの希少性・有用性(27)	赤ちゃんとのふれあいは貴重である(12)	日頃赤ちゃんとのふれあう機会がないから(12)
	赤ちゃんとのふれあいは自分の役に立つ(9)	自分の将来の役に立つから(8) 赤ちゃんへの不安や苦手意識を克服したいから(1)

次に、《赤ちゃんとのふれあうことはあなたにとって大切か》と尋ねた質問に対しては、97.9%が《大切》《どちらかといえば大切》と肯定する回答を、2.0%が《どちらかといえば大切ではない》と否定する回答をした(表3)。赤ちゃんとのふれあいを大切だと考える理由を分析したところ、5のカテゴリ、9の焦点コード、19のオープン・コードに分類された(表4)。その理由としては、将来の自分の子育てやなりたい職業に赤ちゃんとのふれあう経験が役に立つという[赤ちゃんとのふれあう経験の将来での有用性]にふれる回答が最も多かった。このことから、中学生は未来の育児や職業という先を見据えて、赤ちゃんとのふれあう経験が自分自身にとって役に立つものになるだろうと期待する意識をもっていることがわかる。また、[赤ちゃんとのふれあいで感じる心地よさ・好意]や[赤ちゃんとのふれあいによる生命への尊重意識や人間性の涵養]等の回答からは、中学生が赤ちゃんとのふれあうことは自分にとって心地よい経験であり、生命への尊重や人間性を涵養する機会であると価値づけていることが示された。

表3. あなたにとって赤ちゃんとのふれあうことは大切か

選択肢	回答数(割合)
大切	73(73.7%)
どちらかといえば大切	24(24.2%)
どちらかといえば大切ではない	2(2.0%)
大切ではない	0(0.0%)

表4. 中学生が赤ちゃんとのふれあうことを大切だと考える理由 ※一部抜粋

[カテゴリ]	[焦点コード]	<オープン・コード>
赤ちゃんとのふれあう経験の将来での有用性(54)	自分が子育てをする時に役立つ(40)	自分の子育てに役立つから(22) 子育てに必要な知識や技術を得られるから(13) 等
	自分の将来やなりたい職業にふれあう経験が必要(14)	将来のためになりそうだから(11) 保育者や医師などになるために必要だから(3)
赤ちゃんとのふれあいで感じる心地よさ・好意(30)	心地よい気持ちを得られる(29)	心が癒されるから(21) 優しい気持ちになるから(4) 等
	赤ちゃんが好き(1)	好きだから(1)

赤ちゃんとのふれあいによる生命への尊重意識や人間性の涵養(6)	命や赤ちゃんについて考えられる(5)	命の大切さを考えることができるから(3) 赤ちゃんの大切さをすることができるから(1) 等
	人間性豊かに育つ(1)	人間性豊かに育っていけるから(1)
赤ちゃんとの関わり方への理解促進(3)	赤ちゃんとの関わり方がわかる(3)	赤ちゃんを助けたり喜ばせたりできるから(2) 赤ちゃんとのふれあい方を知ることができるから(1)
漠然と感じる大切さ(2)	大切さに対する漠然とした印象(2)	大切だと思うけどよくわからない(1) なんとなく(1)

(2) 赤ちゃんとのふれあうことに否定的な中学生の回答から得られる示唆

前述の《赤ちゃんとのふれあう機会があったとしたら、その赤ちゃんとのふれあってみたくと思うか》という質問に対して、《どちらかといえばふれあいたくない》(6名)、《ふれあいたくない》(2名)と回答した8名(表1参照)は、その理由として[赤ちゃんへの苦手意識・忌避感]や[赤ちゃんとのふれあうことへの不安]を挙げている(表5)。

表5. 機会があっても今後赤ちゃんとのふれあいたくない、どちらかといえばふれあいたくないと考えている理由

[カテゴリ]	[焦点コード]	<オープン・コード>
赤ちゃんへの 苦手意識・忌避感(7)	赤ちゃんのことを苦手と感じているから(3)	赤ちゃんが苦手だから(3)
	衛生的な感覚が受け入れられないから(2)	よだれを垂らしたり、ものを口に入れたりするから(2)
	赤ちゃんがあまり好きではないから(2)	赤ちゃんがあまり好きではないから(2)
赤ちゃんとの ふれあうことへの不安(1)	赤ちゃんとの接し方がわからないから(1)	赤ちゃんとの接し方がわからず不安だから(1)
大切な経験としての 理解(1)	大切な経験だから(1)	大切な経験だから(1)

具体的には、「どう接するのが最適なのか不安だから。小さい子は何となく苦手だから」という赤ちゃんへの接し方がわからないことからの不安・苦手意識や、「自分の服や大切な物を汚されたり、口に入れたりするから」という赤ちゃんが何かを汚すことや壊すことへの嫌悪感、衛生面への不安が窺える回答がみられた。しかし、赤ちゃんとのふれあいたいかを尋ねられた時には《どちらかといえばふれあいたくない》を選択していた6名は、《赤ちゃんとのふれあうことはあなたにとって大切か》という質問に対して全員が《どちらかといえば大切》を選択している。その理由として、「自分が親になった時なにもできなかつたら困るから」「いずれどこかでふれあうことになる可能性もあるだろうし、ある程度の知識は必要になるから」のような、将来を見据えて今赤ちゃんとのふれあう必要性があることから、赤ちゃんとのふれあいを大切だと考えていると記述している。このことから、現在赤ちゃんとのふれあいに意欲的にはなれない中学生であっても、将来自分が赤ちゃんと関わるかもしれない可能性を考慮して、赤ちゃんとのふれあう機会の重要性を認識していることがわかる。

また、赤ちゃんとの機会があればふれあいたいかという質問に《ふれあいたくない》を選択した2名は、赤ちゃんとのふれあうことを《どちらかといえば大切ではない》と回答した2名と一致している。赤ちゃんとのふれあいが大切ではない理由として、「この先生生きていくうえで絶対的に必要だとは思わない」「自分からふれあいにはいきたくない」という記述がされており、赤ちゃんとのふれあうことに一貫して拒否感情を持ち、ふれあいに価値を置かない中学生もいることが示される。それではこのような赤ちゃんに拒否感をもつ中学生にとって、赤ちゃんとのふれあう経験は何も意味をなさないのだろうか。

赤ちゃんや子育てに対する価値観は多様であり、これまでの事業に関する調査でも、赤ちゃんとのふれあいに前

向きではない回答をする小学生が若干名みられてきた。しかし、赤ちゃんとふれあいを経験することで、赤ちゃんに対するイメージや価値観は変化する場合もある。例えば、『令和5年度佐世保市赤ちゃんふれあい事業アンケート調査に関する報告書』では、当初赤ちゃんとふれあいに意欲的でなかった小学生が、『赤ちゃんふれあい事業』と『おおきくなったね』の2回の事業に参加することで、次第に赤ちゃんとふれあいに意欲を持つようになる過程を報告している。赤ちゃんとふれあう経験がどのように作用するのには個人差があるが、このような結果からは、事業を通して赤ちゃんとふれあう経験が複数回あることで、なんらかのタイミング・出来事をきっかけに赤ちゃんに対する苦手意識や忌避感が薄れ、ふれあう意欲が湧く場合もあることを示している。

赤ちゃんとふれあいに否定的だった8名の内、6名が男子で、2名が女子であり、過去のアンケートの記名と今回の調査における記名を照合したところ、8名全員が過去の事業に参加していたが、『小学校時代に赤ちゃんふれあい事業に参加したか』という質問に対して全員「覚えていない」と回答していた。中学生・高校生の幼児とのふれあい体験の効果に関する調査研究¹⁾において、幼児への関心が低い生徒や発達に関する知識が乏しい生徒は中学生男子に多いが、子どもとのふれあいを経験した後は『幼児への関心』及び『幼児の発達に関する知識』が大きく上昇することが示されている。これらのことから、赤ちゃんとふれあいに否定的な中学生にとっては、過去小学校時代に1回、または2回ふれあうだけでは赤ちゃんに対する認識を変化させるまでには至らず、中学校でも赤ちゃんとふれあう経験をすることによって、赤ちゃんに対する関心や発達に関する知識に刺激を与えることができ、否定的だった赤ちゃんとふれあいに対する価値観が変化する可能性があることが推察される。

赤ちゃんに対する認識や価値観の在り方は多様であり、強制されるものではない。しかし、次世代の育成が社会全体の責務であることを考えると、中学生・高校生成に、将来自分が親の役割を果たすことに限定するのではなく、『子育てを支援する社会の一員としての役割を果たす』という視点を包括した²⁾取り組みを提供する必要がある。今後は小学校だけでなく、中学校・高校と継続して赤ちゃんとふれあう機会を持つことの重要性が示唆される。

(3)中学生の子育てに対する意識

中学生に「子育てにどのようなイメージを持っているか」を尋ねたところ、回答は3のカテゴリ、8の焦点コード、14のオープン・コードに分類された(表6)。最も多かったのは、子育てを時間・心身・経済の視点から負担がかかるものであると捉える[子育ての大変さ]に関する記述であり、次いで「大変だけど、子どもの成長を見守っていき、幸せなこと」「子育ては大変だけど、その分可愛いから頑張ろうという気持ちになれると思う」という[大変な中にもある子育ての意義]にふれる内容が多かった。このことから、中学生にとって子育てはまず大変なイメージがあり、その先に意義や喜びがあることを認識していることが明らかとなった。しかし一方で、「とてもつらくていやな思いをしそうで怖い」「お母さんしかやらず、お父さんはたまに育児する。怒りたくなくてもついイライラして怒ってしまう」等の子育てに対する憂慮を実直に綴る回答もあり、中学生は赤ちゃんとふれあう経験が将来自分に必要になるかもしれない意識(2-(1)参照)しながらも、未来で自分自身が担うかもしれない子育てに対して明るいイメージを描けていない現状も示された。

表6. 中学生の子育てに対するイメージ ※一部抜粋

[カテゴリ]	[焦点コード]	<オープン・コード>
子育ての 大変さ(77)	子育ては大変なことというイメージ(29)	大変そう(29)
	子育てに対する時間的な負担(24)	子育てはすることがたくさんある(17) つきっきりでないと危険もある(4) 等
	子育てに対する心身の負担(22)	十分に睡眠がとれない(10) 辛くストレスがたまる(6) 等

	子育てに対する経済的な負担(2)	お金がたくさんかかる(2)
大変な中にある 子育ての意義 (35)	大変な中にある子育ての喜び(32)	大変だけど子どもの成長の喜びややりがいがある(14) 大変だけど楽しいこともある(11) 等
	大変な中にある子育ての大切さ(3)	大変だけど子育ては大切なこと(3)
思い描く子育て像 (4)	子育てにおける家族内の協力体制(3)	夫婦や家族で助け合って子育てをする(3)
	子育ての中心的使命(1)	新しく誕生した命を育てる(1)

(4)『赤ちゃんふれあい事業』への参加経験が中学生の意識に与える影響

過去に参加した『赤ちゃんふれあい事業』が中学3年生になった子どもたちにどのような経験として認識されているのかを検証するため、アンケート回答者99名の内、白南風・木風・潮見小学校で過去事業に参加した際に記名したアンケートと、今回の中学生アンケートの記名が一致した88名を対象として分析を行った。まず、《小学校時代に『赤ちゃんふれあい事業』に参加した経験はあるか》を尋ねたところ、《ある》が39名(44.3%)、《ない》が7名(8.0%)、《覚えていない》が42名(47.7%)となった。実際は88名全員が小学校5年生、あるいは6年生で事業に参加しているので、参加者全体の44.3%が過去の事業が記憶に残り、あとの55.7%は事業に参加したことを明確には覚えていない。したがって、『赤ちゃんふれあい事業』での年1回、あるいは2回の接触経験は、3~4年経過しても参加者の半数近くの記憶に刻みこまれる経験になっていたと言える。

事業に参加した経験が《ある》と回答した39名に、《今でも印象に残っていること》を尋ねたところ、回答の内容は、5つのカテゴリ、9の焦点コード、27のオープン・コードに分類された(表7)。過去の事業を振り返って、最も印象に残っていたのは[事業でふれあった赤ちゃんやお母さんの様子]についてである。特に赤ちゃんについては、赤ちゃんが泣いたり笑ったりしていたことだけでなく、赤ちゃんの小ささ・柔らかさ・あたたかさ・重み等の直接ふれあって五感から得る情報や、<赤ちゃんにも個性があった>こと、まだうまく話せなくても表情や動きで<赤ちゃんが何かを伝えようとしていた>こと等が具体的に記述されていた。また、[赤ちゃんとうれあった時の印象・感情]として、[赤ちゃんとうれあった時に感じたかわいさ・嬉しさ・受容する気持ち]と、[赤ちゃんとうれあった時に感じた難しさ・戸惑う気持ち]という2つの気持ちが表現されていた。回答の中には、「赤ちゃんを抱っこして目を見て笑ってくれてうれしかったかわいかったなという印象がのこっている」という記述もあれば、「ふれあうのが難しかった。どんなことをすればよいのか分からなかった」「お母さんがすごく大変なんだろうなって思ったことをおぼえています」という印象が残っているという率直な記述もあり、このことから、小学校で赤ちゃんとうれあう事業での経験は、赤ちゃんを見て可愛らしさを感じるだけにとどまらず、赤ちゃんに関わろうとする際の扱い難さや育児の大変さを感じることもあり、その記憶が中学生になった今でも記憶に残っていることを示している。

表7. 事業に参加した中学生の記憶に今でも残っている内容 ※一部抜粋

[カテゴリ]	[焦点コード]	<オープン・コード>
事業でふれあった赤ちゃん やお母さんの様子(20)	赤ちゃんの様子(18)	赤ちゃんが泣いていた(5) 赤ちゃんが笑っていた(3) 赤ちゃんは小さかった(1) 赤ちゃんはあたたかかった(1)等
	赤ちゃんのお母さんの様子(2)	赤ちゃんのお母さんがしっかり赤ちゃんを見ていた(1) 赤ちゃんのお母さんが大変そうだった(1)
赤ちゃんとうれあった時の 印象・感情(16)	赤ちゃんとうれあった時に感じたかわいさ・嬉しさ(10)	赤ちゃんをかわいいと思った(6) 赤ちゃんの反応が嬉しかった(2) 等
	赤ちゃんとうれあった時に感じた難しさ・戸惑い(6)	赤ちゃんとのふれあいに難しさ・戸惑いを感じた(5) 赤ちゃんは手がかかると思った(1)

事業で赤ちゃんやお母さんと交流した内容(9)	事業で赤ちゃんとしたこと(4)	赤ちゃんを抱っこした(2) 赤ちゃんとおもちゃで遊んだ(1) 等
	赤ちゃんのお母さんから聞いたこと(3)	赤ちゃんのお母さんから出産の話を聞いた(2) 赤ちゃんのお母さんから夜泣きが大変と聞いた(1)
	事業で赤ちゃんにされたこと(2)	赤ちゃんによだれをかけられた(1) 赤ちゃんが指を握って笑いかけてくれた(1)
事業で学んだ知識(1)	事業を通して学んだ内容(1)	お腹の中での赤ちゃんの成長について学んだ(1)
詳細は記憶にない(1)	詳細は覚えていない(1)	詳細は覚えていない(1)

さらに、事業に参加したことを覚えている 39 名に《事業に参加して赤ちゃんのイメージが変わったか》を尋ねたところ、《変わった》が 11 名(28.2%)、《変わっていない》が 28 名(71.8%)となり、《変わった》と回答した人に《何が変わったか》を尋ねたところ、回答の内容は 3 の焦点コード、10 のオープン・コードに分類された(表 8)。尚、この項目については、全体数が少ないためオープン・コードと焦点コードのみ付した。[赤ちゃんに対する印象・認識]の変化の中には、<赤ちゃんには思ったよりもしっかり意思がある>ことや、<赤ちゃんは想像よりも泣かない>こと等、自分が赤ちゃんとおふれあう前に抱いていたイメージが更新されたという回答や、<実際に関わってみるとかわいい><赤ちゃんはかわいい時はかわいい>、と実際にふれあうことで赤ちゃんに好意的なイメージをもつようになったこと、<どんな赤ちゃんでもお母さんが一生懸命生んだ大切な存在である>と、赤ちゃんという存在の認識が変わったことが挙げられていた。このことから、事業での経験が、赤ちゃんに対するイメージが好意的になったり、赤ちゃんという存在の大切さに気付いたりするきっかけになる場合もあると言える。

また、[育児に対するイメージ・認識]では、子育ての大変さを認識したという回答もあれば、子育てが大変だとわかったうえで、<お世話がつらくても赤ちゃんのためならがんばれる>と思うようになったという回答もあった。このような回答は、事業での経験を通して、子育ての大変さを認識した時にそれを回避しようとするのではなく、それでも赤ちゃんのためなら乗り越えられそうだと前向きに受け止める意識が芽生える可能性を示している。

表 8. 事業に参加して赤ちゃんのイメージが《変わった》と回答した人が認識する変わった内容

[焦点コード]	<オープン・コード>
赤ちゃんに対するイメージ・認識(6)	赤ちゃんには思ったよりもしっかり意思がある(2) 赤ちゃんは想像よりも泣かない(1) 実際に関わってみるとかわいい(1) 赤ちゃんはかわいい時はかわいい(1) どんな赤ちゃんでもお母さんが一生懸命生んだ大切な存在(1)
育児に対するイメージ・認識(4)	育児はご飯をあげることだけではない(1) 赤ちゃんはかわいいだけではなく育てるのが大変(1) お世話がつらくても赤ちゃんのためならがんばれる(1) 子育ては大変(1)
自分の行動・意識(1)	弟妹の出産前にお腹に声をかけたり、身の回りを清潔にしたりするようになった(1)

これまでの分析から、事業で赤ちゃんとおふれあったり、赤ちゃんの保護者から話を聞いたりする経験が、赤ちゃんの扱い難さ、育児の大変さを中学生に印象づけていることが示されている。ではこのように赤ちゃんや育児に対して難しさを感じる経験にはどのような意味があるのだろうか。

子育てには赤ちゃんを「かわいい」と感じる気持ちだけで行えるものではなく、自分の時間・労力・金銭的な犠牲を払っても子どもを育てる責任が伴う。乳幼児とのふれあい体験が中学生の子育てイメージに与える影響を調査した研究³⁾では、乳幼児とのふれあった中学生が、子どもとふれあう充実感や面白さと同時に、大変さも経験していることを明らかにしたうえで、将来子育てに必要な「自己犠牲への適応」や「子どもへの思いやり」を身に付けるためには、子育てのわずらわしさを含んだ楽しさに出会い、子育てについて考える経験が必要だとしている。過去の事業で赤ちゃんに関わることや子育ての大変さが印象に残っているということは、事業が世代間交流の少ない現代において日常的に感じにくくなった子育ての大変さ、わずらわしさを伝えると同時に、その先にある命を育てる責任と喜びに気付くきっかけを提供する貴重な機会となっているという意義があることが示された。

3. インタビューの結果及び考察

アンケートにおいてインタビュー調査への協力を承諾する回答をした中学生を対象に、後日インタビューを実施した。インタビューへの協力を承諾し、かつ当日出席したのは21名で、その内17名が過去に赤ちゃんふれあい事業に参加した経験があり、4名は参加経験がない。ここでは、過去事業に参加した17名の中から、対児感情評定尺度（個人の中にある赤ちゃんへの感情を、愛着的方向と嫌悪的方向から捉えるもの）の拮抗指数⁴⁾が40以上であった4名の語りに着目する。その理由は、この4名はインタビューに応じた中学生の中で拮抗指数が高い、つまり赤ちゃんに対して正の感情である愛着と、負の感情である嫌悪を合わせもつ中学生だからである。例えば4名の内1名は、アンケート調査で、「機会があれば赤ちゃんといふれあいたいか」と尋ねられて「自分から触れ合うのも怖いし、触れ合いたいという気持ちもある」と、赤ちゃんに対して複雑な葛藤があることを自覚する回答をしていた。

このような個人の中で葛藤する赤ちゃんに対する感情を抱えた4名が、過去の赤ちゃん事業での経験をふりかえった時にどのような意味を感じているのか、また赤ちゃんという存在をどう位置付けているかを検討することで、赤ちゃん事業に参加したことが赤ちゃんに対して愛着と嫌悪の双方を感じている中学生にどのような影響を与えたのか、事業への参加が赤ちゃんに対する認識の何を形作るのかを探っていききたい。

まず、アンケートでは4名中1名が過去の事業について覚えており、3名は事業への参加経験を《覚えていない》と回答していたが、インタビューで事業の話をしたり事業の写真を見せたりしたところ、全員小学生の時に赤ちゃんふれあい事業に参加した経験を思い出した。その中で、事業時の赤ちゃんの様子や保護者と話した内容まで覚えていた3名は、「事業の経験が今の中学生である自分にとって意味があるか」という質問に対して、「意味がある」と答え、その理由は「今後赤ちゃんといふれあう時に過去のふれあった経験が役に立つ」（2名）「将来子どもができた時に対応できる」（1名）であった。また、「事業の経験が将来大人になって子どもをもった時に意味があるか」という質問に対しては、4名全員が「意味がある」と答えている。その理由は「子育ての役に立つ」「赤ちゃんの抱き方がわかる」等であった。

また、インタビューで《中学生になった今、もう一度赤ちゃんといふれあう場所があったら参加したいか》という質問に、全員が「参加したい」と答えており、その理由として「赤ちゃんといふれあう機会はあまりないから参加したい」（2名）、「将来の仕事に活かせると思うから関わりたい」（1名）、「小学校の事業での反省を生かして関わりたい」（1名）と述べていた。

さらに、「赤ちゃんという存在は社会の中でどんな存在だと捉えられるべきか」という質問に「自分たちの次の社会・将来をつくってくれる」（2名）、「自分ではできないことが多いので大人がしっかりサポートして大切にするべき」（1名）、「大切」（1名）」と、全員が赤ちゃんを社会の中で大切な存在だと認識する回答をした。これらの語りから、赤ちゃんに対して愛着の感情だけでなく嫌悪の感情を抱いている中学生であっても、事業の経験は記憶に

残っており、過去の事業での経験は現在の、あるいは将来の自分にとって意味があると認識し、赤ちゃんとふれあう意欲をもっていることが明らかとなった。また、社会の中で赤ちゃんを大切な・貴重な存在として捉えている回答が多いことから、赤ちゃんに対しての思いや感情は一方向ではないとしても、赤ちゃんとふれあう経験の意味や赤ちゃんという存在の社会的意義を認めていることがわかった。

このような傾向が事業に参加したから生じているのかまで断定はできないが、過去に行った事業の長期的効果を考えるうえで、アンケートでは事業のことを《覚えていない》と回答した3名が、インタビューを通してその時の記憶を掘り起こし、事業での経験をふりかえったり意味づけたりした語りが得られたことには意義がある。このことは、事業のデザインとして、赤ちゃんとふれあった数年後にその記憶を呼び起こして当時の経験を自分の中に位置づけていく機会を盛り込むことが有効であることも示している。今後も、アンケートだけではすくいきれない中学生の記憶、認識、意見等をインタビューデータから分析していきたい。

IV. まとめ

令和4(2022)年度佐世保市赤ちゃんふれあい事業中学生追跡調査のアンケート結果からは、過去の事業に参加した小学生がその経験を中学3年生になって記憶しているか、どう受け止めているかは多様で、赤ちゃんや子育てについて考える機会が個人の中でどのように作用するかは違いがあることが明らかとなった。中学生の中には赤ちゃんを「かわいい」「大切な存在」だと捉え、子育てを「大変だけど意義があること」と認識する意見がある一方で、赤ちゃんとの関わりや子育てに苦手意識・拒否感を持っていることが窺えるような意見もある。小学生の時に事業で赤ちゃんとふれあって赤ちゃんや子育てについて意識する機会を提供することは、赤ちゃんの可愛らしさ、命の尊さ、育児の大変さを知るという短期的意味があるとともに、子育ての大変さや難しさも知っておくことで、中学生となった彼らが今後社会の担い手としてどのような人生、生き方を選択するかという岐路に立った時に、何を選び取るのかを考える際の根拠やきっかけを提供する長期的意味があるともいえる。これから生きる中学生たちが命を育む大切さ、大変さ、難しさを知り、子育てや赤ちゃんについて考える機会を得ることには、大きな価値があるだろう。そして、中学生が親となる、あるいは社会の中で子育てを応援する意識をもった大人になるためには、赤ちゃんとのふれあいは小学校での1~2回で十分なものではなく、中学校・高校と継続して行うことで、赤ちゃんや子育てに関する認識が変化するきっかけとなる可能性がある。今後赤ちゃんふれあい事業をより長期的な視野、0歳から18歳までの育ちをつなげるビジョンをもって、中学校・高校においても継続して行うことが望まれる。

インタビューの結果からは、中学3年生が小学生の時に経験した事業を振り返ると、その経験が将来、あるいは今の自分にとって意味があると思えるものであったことがわかった。また、赤ちゃんに対して接近感情と回避感情の両方をもっている場合でも、小学生の時に事業に参加したことに意味を見出し、赤ちゃんに関わる意欲を持ち、赤ちゃんを大切な庇護すべき存在として捉えていた。このことは、事業への参加は中学生になっても有意義に感じられるものであること、赤ちゃんに対する感情は様々でも、赤ちゃん存在やふれあう機会の価値を否定する見方に必ずしもつながらないことを示している。きょうだい構成や赤ちゃんとふれあった経験、価値観は一人ひとり違っていても、今回着目した4名全員が、赤ちゃんが社会において「大切に扱われるべき」「次世代を担っている存在」といった回答をしていることから考えても、赤ちゃんやその保護者とふれあった経験が何らかの形で中学生の赤ちゃんや子育てに関する見方、価値観に影響を与えていると考えられる。

今後も継続して調査研究を進め、より詳細に中学生の赤ちゃんや子育てに関する意識、そして赤ちゃんふれあい事業の意義について検討を行っていく。

脚注

- 1) 岡野雅子・伊藤葉子・倉持清美・金田利子(2012)「中・高校の家庭科における「幼児とのふれ合い体験」を含む保育学習の効果-幼児への関心・イメージ・知識・共感的応答性の変化とその関連-」日本家政学会誌 63(4),p175~184
- 2) 伊藤葉子(2019)「中・高校生の親性準備性の発達と保育体験学習」日本家政学会誌 70(6),p321~327
- 3) 佐藤洋美(2004)「乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響」生活体験学習研究 4,p35~54
- 4) 拮抗指数は対児感情を測定するために花沢成一によって提唱された概念
 …本調査のアンケートでは、中学生の赤ちゃんに対する感情を知るために「対児感情評定尺度」と呼ばれる評定を用いている。赤ちゃんを肯定し、受容する感情を表す「あたたかい・うつくしい・ほほえましい」等の14項目と、赤ちゃんを否定し、拒否する感情を表す「めんどうくさい・わずらわしい・こわい」等の14項目から成り、直感的にその語が赤ちゃんのイメージとして「非常にそのとおり」「そのとおり」「少しそのとおり」「そんなことはない」を選択する。赤ちゃんを受容する語に「非常にそのとおり」「そのとおり」を多くつけた場合は「**接近感情**」を表す接近得点が高くなり、否定する語につけた場合は「**回避感情**」を表す回避得点が高くなり、接近感情と回避感情がどちらも相克しあう場合は「**拮抗指数**」が50に近い数値になる。拮抗指数が50に近いという事は、個人の中で赤ちゃんへの接近感情と回避感情が同居していることを示す。
 引用元:花沢成一「母性心理学」医学書院(1992)

中学生追跡調査アンケート項目	
問1	「赤ちゃん」と聞いて何を思い浮かべますか?(自由記述回答)
問2	赤ちゃんとふれあう機会があったとしたらあなたはその赤ちゃんとふれあってみたいですか?(選択肢) そう考える理由もあわせて教えてください(自由記述回答)
問3	あなたはこれまでの人生で、赤ちゃんを触ったり、関わったりする機会がありましたか?(選択肢) あると答えた人は、これまでどのような時に、どれくらい、ふれあう機会がありましたか?
問4	赤ちゃんとふれあうことはあなたにとって大切なことですか?(選択肢) そう考える理由も教えてください(自由記述回答)
問5	あなたの性別・きょうだい構成・出身小学校を教えてください
問6	あなたは「子育て」にどのようなイメージを持っていますか?(自由記述回答)
問7	あなたは小学校時代に「赤ちゃんふれあい事業」に参加した経験がありますか?(選択肢) あると答えた人は、今でも印象に残っていることを教えてください(自由記述回答) 赤ちゃん事業をきっかけに、赤ちゃんに対するイメージは何か変わりましたか?(選択肢) 変わったという人は、何が変わったか教えてください(自由記述回答)
評定	現在あなたは赤ちゃんにどのようなイメージを持っておられますか?下記の評点表の各項目で、あなたの気持ちに合うものを一つ選んでください(花沢の評定表から引用)